



「授業展開の基礎・基本」

新年あけましておめでとうございます。今年も、皆様のニーズに応える研修・講座の実施に努めてまいりますのでよろしくお願いいたします。

さて、授業がうまくいかないと悩み、苦しんでいるのが若い教師ではないでしょうか。授業で最も大切なことは、教材研究をすることで「これだけは何としても教えたいという内容」＝「ねらい」を『鮮明につかむ』ことです。「ねらい」を鮮明に持たず授業に臨んでいると、何をやっているかわからないような授業になってしまいます。ぎりぎりまで小さく絞った「ねらい」をしっかり持つことが授業の第一歩です。内容・ねらいが鮮明になり、面白いものであると、つい教えたくくなります。教えてしまったのでは、授業にはなりません。ぐっつがまんします。授業は、子供たち自身に「手間」をかけさせ、少しは苦勞させなければ意味がないのです。

そこで、「これだけは何としても教えたい」というものを、「技術」を使って、「子供がやってみよう、調べよう、解決しよう、学びたい」というものに「転化」しなければなりません。この「転化」が「授業」の本質です。「転化」するには、「技術」が必要になります。主な「技術」について簡単にふれてみます。

1, 基本の授業

まずは次の状態の授業を作りあげることが大切です。そんなに簡単なことではありませんが、それを乗り越えることです。

- ①子供たちの顔を見ながら授業をする
- ②はっきりした声で子供たちに話す
- ③子供の間を机間指導する

2, 発問

「質問」と「発問」は大きく違います。文科省のHPにも、以下のように示されています。

- (ア)「質問」…子供が本文を見れば分かるもの
- (イ)「発問」…子供の思考・認識過程を経るもの

例えば、(ア)「質問」…今朝は朝ご飯を食べてきましたか？

(イ)「発問」…朝ご飯は何でしたか？

(イ)のように多様な反応・思考(考え)を引き出すのが「発問」です。(ア)には、明確な「答え」があります。もちろん、「質問」が大切な場面もあります。

しかし、教師が考えている正解?を求めようとする「質問」をしてしまうと、子供は、教師の意図に合わせて答えようとします。こうなると考えも画一化してしまい、子供も教師もおもしろくなくなってしまいます。何を学ぶか、考えるかを明確に自覚させる発問の工夫が必要です。

3, 指示ー確認

授業の中で教師が指示を出します。子供たちが指示通りきちんとできているか、教師はちょっとだけ時間をとって机間指導をします。しかし、漠然と見ています。確認をほとんどしていません。だから、指導が徹底していきません。

「一時に一事の原則」があります。「指示」を出したら、いつも全体ができているか「確認」をします。これだけで授業が変わります。

- (1)算数の教科書を出さない。→出しているか「確認」
- (2)24ページを開きさない。→開いているか「確認」
- (3)⑥番を手で押さえない。→押さえているか「確認」
- (4)そこをノートにやります。→ノートを出しているか「確認」

この4つの指示がなかなか伝わりません。「先生、どこやるの?」と聞き返す子供がいます。発達障害の子供たちに多いです。「今、言ったでしょう。何を聞いているの?」と何度も叱ったらさらに混乱を招きます。何度も繰り返し教えてあげます。

4, 活動

子供がつまらなそうにしている授業の特徴は「おしゃべり授業」です。1時間のほとんどを教師がおしゃべりしています。しかし、ほとんどの教師が「おしゃべり」を自覚していません。まず、自分がどれだけ「おしゃべり授業」をしているのか、録音することを勧めたいです。「おしゃべり」が自覚できたら、「1時間の授業の流れ」に「活動」を入れる工夫が考えられます。ところが、その「活動」に「指導」が入っておらず、ただやりっぱなしの「活動」になっていることが多いです。「音読をするだけ」「ノートに書かせるだけ」等です。

子供たちは、授業中に次のような「活動」をしています。

- (1)「見る」「聞く」「読む」「覚える」(インプットの活動)
- (2)「書く」「話す」「話し合う」「動く」(アウトプットの活動)

「おしゃべり授業」の克服には、主に「書く」「話す」「話し合う」の3つの「活動」が問われています。子供たちは、「言葉」で考えます。だから、「言葉」を発する活動をどんどん入れていく必要があります。

- ①「書く」活動 … 主要な発問には、必ず自分の予想を書かせるようにしたいです。「考える」ということが大きなテーマです。
- ②「話す」活動 … 自分で予想して考えたことを他の子供に伝えることがテーマとなります。
- ③「話し合う」活動 … ペアでの話し合い、グループでの話し合いです。グループでの話し合いは、3、4人の人数にしたいです。それ以上の人数では、傍観者が出てくる恐れがあります。この話し合いを軌道に乗せるためには、最低1ヶ月はかかります。粘り強く続けていくことです。

5, 空白禁止

職員室で、若い教師が同学年のベテラン教師に相談しています。「自分のクラスだけ、教科の進度が遅れています」。「早く進めようとするのですが、なかなか進みません。どうしていいのかわかっています」その理由はいくつか考えられますが、その1つとして分からない子供たちに関わりすぎることがあげられます。机の側に座り込んで一生懸命教えているよく見る光景です。周りの子供はもう問題が終わってしまっていて、おしゃべりをしたり、立ち歩いたりしている子供もいます。それでも、必死に教えています。これをやってはいけません。この積み重ねがクラスの荒れにつながります。たとえ一人の子供でも空白の時間をつくるという「空白禁止の原則」があります。「じゃあ、分からない子供に教えないでいいんですか?」となります。座り込んで教え込んでも、ほとんど効果はないはずですが。そういう子供は単元全体で何とか救ってあげる手立てを打ってあげることです。また、放課後の時間、給食の時間等が使えたら、その時間を効果的に使いたいです。

最後に、授業技量は「計画的に、意識して授業を積み重ねなければ向上しません」。はっきりしているのは、すぐには授業技量を上げることはできません。ベテランの先生に、授業の指摘を様々に受けたとしても、すぐにはその指摘を克服することは、なかなかできません。教育技術を身につけることは、そんな簡単なことではありません。繰り返し、繰り返し行い、意識しなくてもいい程度の状態になって、初めて身につくものです。

ここで確実に授業技量を上げていく方法を提案します。「一人研究授業」です。自分の授業を録音して、それを聞くことです。肝心なのは、自分の「発問・指示・説明」です。無駄な言葉などをチェックします。きちんとメモもします。そして、特別な授業ではなく、普段の授業がいいです。子供たちには、「先生が勉強するために録音するだけだから」と断ればいいです。はじめは最後まで聞き通すことは難しいです。自分の声、曖昧な発問や指示、説明に嫌気がさすからです。そう考えてがまんして聞きます。そこからどのように立ち上がれるかが、これからの教師生活を決めてしまうくらい大きなできごとになります。

研修 1月 教育研究所事業

20日 (木)	初任者研修⑬	オンデマンド
24日 (月)	情報教育研修会⑤	オンライン
	ICT教育情報教育推進部会	オンライン



新刊のお知らせ

書名	著者
『主体的・対話的で深く、新学習指導要領を読む』	新保 修
『アドラー式 勇気づけの言葉かけ事典』	原田 綾子
* 『ICT×OO』 GIGA スクール対応本 各教科多数	
明治図書出版	